

---

# 光探し

鍵翔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

光探し

### 【Nコード】

N2344G

### 【作者名】

鍵翔

### 【あらすじ】

彼らは学区内で有名なグループだった。そこに新たな光が差し込んだら・・・なんか色々な事が始まった！苦労性の女顔、サボり魔、天真爛漫、猪突猛進、寡黙・・・兎に角頑張っ書いていきます！

プロローグ 三月三十一日(前書き)

拙いけれども頑張っています。

プロローグ 三月三十一日

質問です。彼らについて如何思いますか？

「学園内で一番有名じゃないかな」（二年生徒A）

「結構目立っているよね。カッコイイ男子が2人、可愛い女子が2人いるからね・・・え？男子は3人」

（一年生徒B）

「彼らの中の2人は中学の時剣道部に入部しているが、二年の方は全然練習には来ないね。一年の方はちゃんと来るけど彼は強すぎるだね、三年生の僕達でも歯が立たない位だからね」（剣道部所属三年生徒D）

「彼女は本当に部の手伝いをしてくれて良かったわ、彼女のおかげで中学の時は全国に行けたからね。」

彼女、気付いてないけどファンクラブが出来るぐらいに人気あるしちょっと嫉妬しちゃうね」

(陸上部所属三年生徒S)

「そう言えばあの女顔の男子居たよね。パツと見地味だけど結構力ツコイイよね」(数学教師E)

「まったく何故彼は練習に来ないんだ！部の中では一番実力が有るのに面倒だ、眠いだとかでまったく来る気がない！大会に出れば間違いない優勝する事が出来(以下略)」(剣道部副部長)

.....エトセトラ.....

.....

「ぶっ」

集めてみると色々と有るわね〜この子等。それにしても・・・

「編集はキツイね〜」

「無駄口叩いてないで仕事して下さい部長」

何でこんなにあるの？軽く二百はあるわよこれ。

「よく耳にするから試しに！・・・と思ってやったら」

「このようになったと・・・期限明日ですよ」

はあ・・・終わりそうないよ、これ

「だれか〜手伝ってください〜」

「泣き言を言っていないで手を動かして下さい」

「へルプミ〜」

.....

『次は光鐘〜次は・・・』

・・・あ！お、降りなきや！

『ではなく』

ゴン

「ツ~~~~」

「フライングかよ！」

「これでいいのか」

よ、良くない・・・

『嘘。本当に光鐘〜もうすぐドアが閉まります〜す』

「わあああ!!」

「フエイクかい!!」

「これも如何かと思つぞ」

「そうですね!今は!

『ドアが閉まりまゝす』

プシュ

ギ、ギリギリセーフ・・・

「危なかつた・・・ええつと場所は何処だっけ?」

メモはたしか・・・あ、此処だ此処。

「ふふ、楽しみだな・・・元気かな彼・・・」

四月一日

何かが動く出す

続く

「ちょっと！次って」

「俺ら全く出番無いな」

「次からって大丈夫？」

「成るよつに成る・・・のか？」

プロローグ 三月三十一日（後書き）

本編は次からです。

此処まで読んでくれて有難う御座います。

第二話 四月一日 午前（前書き）

まだまだ拙いものですがどうぞ

第二話 四月一日 午前

ジリジリリッッ！！！

「朝……何時？……六時か……」

眠い……と言いたいけど

「今日は始業式だったはず……春休みも終わってるし、仕方ないか」

それよりも

「朝ごはん、朝ごはん」

彼らが来る前に早く作らないと

「こんな感じで良いかな」

白米に焼き魚、それにワカメの味噌汁に沢庵。

この朝食を三人分を作って後は・・・

ピンポン

「あ、今回は早いね」

別に玄関に行かなくていい、それは・・・

「お、今日は和食か。久しぶりだな」

「お邪魔します 琥珀兄」

二人は勝手気ままに入ってくるからね。

この二人は黒金兄弟。兄は悠里、妹は珊瑚で二人とも大切な友人であるのだけど……

「しつつかし、悪いね〜朝飯ご馳走さん」

「私は琥珀兄に会えるから良いけど、ご馳走様〜」

ちよつとだけ自分勝手なところがあるんだよこの二人は……つて！

「二人とも食べるの早！つて僕の方は！？」

「食ったけど？」

「悠里！」

「すまん。悪かった」

ちよつとじゃなく、かなり自分勝手でしたね悠里は……はあ〜

「食べちゃったら仕方ないか。コンビニか何かで……琥珀兄！」

？如何したの珊瑚？」

「あ、あの・・・」

？如何したのかな・・・？顔が赤いけど・・・

「悠里兄が食べちゃったお詫びに昼は私が作るよ。前にも色々迷惑掛けたし・・・ダメ？」

お昼か・・・そういえば最近珊瑚のご飯食べてないし・・・今日は始業式で午前で終わるし

「良いよ」

「本当！？良かった〜」

？なんでほっとしているのかな？

「あ〜お二人さん・・・そろそろやばくないかな・・・時間が」

「「え・・・遅刻!!」「」

「お〜やばい、やばい。速くしろよ〜」

「悠里！君が騒動の元凶！」

今は・・・八時二十分！！本当にやばい！

「琥珀兄〜、悠里兄〜いつてらしゃい〜」

いつてきまゝす!!・・・あれ?

「珊瑚は?」

「明日が入学式だからな、明日からだろ。しっかりしろ」

そうでした・・・

これが僕の、一ノ瀬琥珀の日常で・・・  
この日常にまた新しい光が入る事をまだ知りませんでした・・・

「あれ？こうして遅刻ギリギリなのは悠里のせ」さて、飛ばして行くか！」「って悠里！」

第二話 四月一日 午前（後書き）

一日二日で書ける方凄いです・・・  
まだ未熟ですが宜しく願います。

第三話 四月一日 正午

八時三十九分！ギリギリだった・・・

「いや〜クラスがあらかじめ決まっていた良かった良かった」

「悠里、新学期早々走る事になった原因作ったのは君だから」

何とか成ってよかった・・・けど、疲れた。

「しかし、どうせ式なんて直に終わるならしなくていいんだかな・・・」

「まあ、ある意味この学校だから・・・」

僕らが通っているこの光鐘学園。元々此処に光輝く釣り鐘があった所に学園を建てたから、光鐘学園と

決めたらしい・・・

で、なぜ直に終わるのかと言つと・・・

「ワシは長いのは嫌いじゃ！だから長話はするな！」

と初代校長が言った事から式は普通の学校より半分ぐらい短い。

だから、クラスなどは早く決め、休みまえには知らされる。

楽しみが少ないと言う人が多々居るが・・・

あ、担任の先生が来た。

「全員居るな〜そんじゃ、式に行くから並べ〜」

先生・・・適當すぎ

「ま、面倒だからさっさと終わる様並ぶか」

「そつだね」

式内

「皆さん、無事な様ですね。長々話をせず、では式は終わらせます」

・・・

「・・・短すぎないか、今回」

「所有時間・・・五分」

これでいいのか先生方・・・

「さて、式も終わったし、連絡も来週にしてくれにてLRHRも終わりだ」

終わりか・・・早く帰れるから楽だな

「そうだ」ノ瀬

「はい？」

「ちよつと来い」

あれ・・・何かしたっけ？

「遅刻の事で怒られるのかもな」

「してないし、それなら悠里も一緒だからね」

じゃないからなんだろう・・・

「御前、昔に何かしたか」

はい・・・？

「行き成りなんですかそれ」

「無いのか、無いならそれでいい」

ってあれ？それだけ？あの〜

「なんじゃそれ？」

「そうだね・・・昔って言ってたけど、其れしか言ってなくて・・・」

「へ〜そんな事があったんだ・・・」

アレから直に家に帰り、珊瑚の作った昼食を食べてあのやり取りを話していた。

「あれじゃなにを言いたかったのかな・・・」

「さあね〜けど・・・」

「ま、何かあっても俺らやあいつは何時でも味方だ」

「！悠里兄！それ私のセリフ！」

二人はそう言つて口喧嘩を始めた。

はあ・・・本当にこの二人は・・・

「二人ともいいが

ピンポン

「？誰だろう？葵かな？」

「かもな。見に行くか」

「そうね」

其の時にきちんと聞いておくべきだった。

「べじぞ」

なぜなら

そこに居たのは・・・

「琥珀!!」

綺麗な銀髪の・・・

「…………誰？」

この後大変な事が起こるのだから……

第三話 四月一日 正午（後書き）

やっと三話目です。次を早く書けるに頑張ります。

第四話 四月一日 午後

「…………誰？」

「え？」

本当の誰だろう…………？

「いや、だ」「忘れたのですか！私です！私！……………」

えっと…………如何しよう

「あ、ちょっといいかなお二人さん」

「悠里！そんなにのんびりしていの！」

「のんびりはしてない。其の前にいつまで此処に居るつもりだ」

「いったい何が・・・！」

此処は極一般の住宅地。それも玄関前だと・・・つまり、

「一ノ瀬さん。どうし・・・失礼、ごゆっくり」

この様に近所に誤解が・・・じゃなく！

「と、とにかく！中に！」

「・・・」

「あ、あの〜」

「・・・」

この子、顔を伏せて・・・もしかして

「おなか空いてる？」

「なぜ其処に辿り着く、先輩」

あれ、女の子にしては低いな……？じゃなくて、この声って……

「葵？」

「そうです。一体なんだこれは」

呉羽葵。名前は女の子みたいだが、れっきとした男で見た目は華奢だが、  
剣道で負け無しの後輩で、彼とは悠里経由で……ってそんな場合じゃない！

「葵！ちょっと手を貸して！とりあえずこの子を中に！」

「……な……ま……」

「え？」

「喋ったな」

なにか喋った？何だろう……

「お腹……空きました……」

ぐう~~~~

……

「やっぱりそうなんだ」

「いや、何故やっぱりになる!」

お腹空けばそうなるよ。それなら

「葵は家にこの子を家に入れるから手伝ってくれない?あと珊瑚はご飯の用意宜しく」

「はい……はあ」

「……なぜこうなる……」

「しかしこうもコントみたいに」

?二人して如何したの、そして悠里は面白そうに見てないで手伝って!

「ご馳走様でした」

「お、お粗末様・・・」

とりあえず家に入れて、ご飯を作ったが・・・

「これ、何人前だ？珊瑚」

「えっと、四人前ぐらい・・・かな」

「美味しかったです」

「あ、ありがとう」

本当に良く食べた。おかげで今家の食料はなし・・・このあと如何しよう・・・

「有難う御座います二日間何も食べてなくて・・・えっと、琥珀さん彼女は？」

あれ？すこし不機嫌そうだけど・・・気のせいかな？それより先に

「え・・・あ、ああ彼女は珊瑚。黒金珊瑚だよ」

「えっと・・・始めましてかな？私は黒金珊瑚、でこっちが」

「悠里だ。宜しく」

「それでこつちが・・・」

「呉羽葵だ」

「それで僕は」「」「知って（る、ます、から（」「」「・・・」

皆知ってるよね・・・皆？

「あれ？えっと・・・なんで君まで知ってるの？」

多分初対面のはず・・・

「まだ思い出さないのですか！私はエイリス！エイリス・ブルーネスです！」

「婚約者のエイリス・ブルーネスです！」

・・・・・・・・・・・・・・・・

「『『『~~~~~(は~~~~' なんぞすっ~~~~)!!』』』」  
「~~~~~」

第四話 四月一日 午後（後書き）

やっと書けた・・・

悠里「いや、時間掛かりすぎだろ」

巧く書けなくて。

悠里「・・・まあいい、それで何時になったら一日が  
終わるんだ？」

・・・

悠里「目処はまだかよ・・・読んでくれてあんながとな」

・・・あと、三・四話・・・かな？

悠里「長・・・」

第五話 四月一日 午後 弐（前書き）

第五話 四月一日 午後 貳

「琥珀兄！婚約者つて本当！」

「聞いてないし、知らないよこんな事！」

こんな事をするのは……………

「琥珀の両親に、親父さんの伯父・伯母の二人に……………」

「先輩の親の会社の上司の三人…………あと他の親戚も入れると……………」

「数が多すぎる……………」

誰がやったのかが分からない……………

ピンポン

「また来たな」

今度は誰です……出来ればまともな人が良いけど。

玄関に行ってみると、願いは通じたのか

「琥珀、ちよつと聞きたい事が……遅かったかな、これは」

「朝神さん！帰れたんですね！」

「琥珀兄、その言い方は無いんじゃないかな……」

「珊瑚。こいつを舐めてはいけない、コイツほどの方向音痴はいないぞ」

「みんなして言いたい放題だね」

朝神さんは親戚の一人で光鐘の先生だが、途轍もない方向音痴で遠出をしたら2・3ヶ月は帰ってこない。

こんなんでも有名大学に行けるぐらいに頭は良いし、優しい人なの  
だけど……

「あの～すみませんけど……遅かったってなんですか？」

そつだ、遅かったと言つてたよね……まさか……

「あ、朝神さん遅かったですね」

「やっぱり……」

「やっぱり？」

.....

「そんな事言ってないよ」

「「「「はい!?!?!」」」」

「だから、婚約なんて知らないよ。大体そんな一方的なのはしない」

「???話が繋がらない・・・こっちのと

「え?違っんですか?」

こっちの話が

「それだとあなたの妄想になるな」

「そっだよ!行き成り婚約なんて・・・」

葵と珊瑚はこれで・・・悠里は

「エイリス。茶飲むか?」

「お願いします」

すっかり仲良くやってるし・・・

「えっと、エイリス・・・さん?」

「はい」

「婚約って・・・嘘ですよ・・・?」

「そうです」

即答!?

「まだ、してませんね。今します?」

「まだ?そして今?・・・ちょっと待って。色々気になるところが・・・」

SIDE・悠里

さて、あっちはあっちで話しているし、如何すかな・・・

「悠里」

「ん?如何した。葵」

「たく、葵の奴敬語はなしかよ・・・ま、されたらされたで

気持ち悪いだけだが。

「今回の此れ。悠里は如何考える」

「そうだな・・・此れについては分かっている事は少ない・・・  
つてか、こりゃ無いに等しいぜ。あちらさん、エイリスとこっちの  
朝神の話は全然違うし・・・ま、分かっているのは一個あるな」

「それは」

「面倒事になるって事だな」

俺ならこれで良いが、問題は・・・

SIDE・珊瑚

「どっしりよっ・・・」

まさか琥珀兄に婚約なんて・・・けど、違つかもしれない。  
それなら良いけど、もし本当なら・・・

弱気なつちやたらダメ！また、あんな事になりたくない！  
今は！

SIDE・琥珀

「第一、僕たちは初対面だと思うけど」

幾らなんでもあの人たちの事だ。

無理やりでも、相手の気持ちぐらいは考えるはず。

いままでやってきたのは知り合いの人だったし・・・

・・・それで全て駄目だったけど・・・

「・・・十年前」

「え？」

「覚えて・・・いないですか？」

十年前・・・

『・・・れい・・・か・・・』

『ほん・・・』

『私は・・・』

「・・・森・・・約束・・・」

「え？」

いまいち判らない事はあるけど・・・確か・・・

「森に居た・・・子？」

そう言った途端

ドン・・・

「やっぱり覚えていた！」

「え？いやあの・・・」

な、ななな・・・

「それじゃ……」

「ストップ」

「はい？」

そこには、

「こつちに解る様に説明……してくれるよな」

なんだかよく解らない感じの悠里達がいて、あと……

「……」

珊瑚は神妙な顔をしていたのは解った。

第五話 四月一日 午後 貳（後書き）

ふう……

葵「長い……」

まだ続くけど……

葵「どの位だ」

三話ぐらい

葵「……さつさと書け」

分かりました……あ、そうだ。葵これ読んでいて

葵「？……この『光探し』についての感想がありましたら書いてください？……欠点しかないと思うぞ」

それについては直していけるように頑張る。

葵「そうか……頑張れ」

頑張ります。

第六話 四月一日 午後 参

「え、まず最初に何から聞こうか……」  
説明はするとは言ったけど……

「悠里、珊瑚は怒ってるの？」

「は？いきなり何を……」

「だってアレ」

一人、離れた場所に座っていて、  
表情も何処か浮かない顔をしている。

「……はあ」

「なんで、ため息ついてるの？」

「お前の鈍感さにはついて行けねーわ」

「????」

「・・・・・・・・・・」

「其れじゃあ、先ず一つ目は『何処で知り合ったのか?』だね」

「どうやら朝神さん、葵、悠里そして最後に珊瑚の順に質問をしていくらしい。」

「それよりも・・・」

「それは、エイリスの故郷の森だね」

「先輩、そういえばエイリス・・・さんの故郷は何処です?」

「そういえば言ってなかったね。故郷は「琥珀」・・・?」

「此れについては私が答えます。それに私についての質問ですので

答えも私が出ます。いいですよ？」

「……ああ」

これについては確かにエイリスの方がいいかもしれない。

「それじゃあ、お願い」

「はい」

そして説明は始まった……

「琥珀と初めて会ったのは十年前のロシアです」

エイリスの答えに葵は納得したが……

「十年前ね……其れなら俺らと会うまえだし、外国であったのなら仕方ない……」

つて、十年前のロシア!？」

悠里の驚きにエイリスは、

「まあ、そうなりますね……」

この話をするところなるのはわかっていたようだ。

「十年前、確かに私は琥珀と会ってます……次は何ですか？」

「……………ですね」

「そうか、あんがとよ」

これで悠里も終わり、最後は……………

「私……………だね」

珊瑚一人だけど、

(気のせいかな……………何だかとんでもない事が起きそう……………)

そんな事を考えていると、

「それじゃ、私の質問は……………結婚ってしてるの?」

「……………!」

一番知りたく、それでも聞けなかった事を質問してきた！  
僕や朝神さんはすこし緊張したが、葵と悠里は・・・

「葵、どっちだと思う？俺はしてない」

「・・・分の悪い賭けは好まない」

賭けをやっていた・・・それよりも

「婚約については・・・してません」

「それじゃあ・・・なんで！」

「約束です」

また『約束』だ。

「今まで思ってたけど、その『約束』って何？まさか子供の時に  
言ったから、此処に来たの」

珊瑚の口調が段々激しくなってきた

「ふざけないで！昔に会ってそれで本当に結婚をしようなんて！  
そんな子供の頃にした事で琥珀兄を持ってかないで！  
あんたなんかに・・・」

「私の好きな琥珀兄を持ってかないで！！」

それだけを言うと珊瑚は玄関に向かい、  
そして直に大きな音を発して外に出てってしまった。

「・・・皆、少し出かけてくる」

悠里が何か言っていたが、それに気にする余裕は僕に無かった。

SIDE・悠里

「あの、えって・・・」

琥珀、珊瑚が出てっつてしまい気まずい空気が流れていて  
エイリスは困っているが・・・

「ほんじゃ、エイリス」

本当に聞きたいことを聞きますか。

「さつきから、珊瑚を挑発してたが・・・何でだ」

「・・・気付いていますか」

「「え？（は？）」「」

「どうやら、この二人は気付いていなかったようだが、

「・・・わかんなかったのか？」

「いや、普通に信じてたよ」

「まあ、人が好い朝神はしょうがないが・・・

「葵は？」

「まったく」

「おいおい、二人とも少しは気付け・・・まあそれより」

「質問について・・・ですね」

「エイリスは観念したように

「あれは・・・」

第六話 四月一日 午後 参(後書き)

よし！

珊瑚「何が！」

此処から急展開する・・・はず

珊瑚「其れより何なのあれ！？行き成り」「こ」・・・

この後に色々判るかな

珊瑚「この後・・・過去についてね」

そ、珊瑚の過去について

珊瑚「・・・書けるの？」

私・・・次回話書けたら・・・投稿するんだ・・・

珊瑚「それ普通だし、なんかやばそうなんだけど・・・」

気にするな、私は気にする

珊瑚「気になるのね・・・後、悠里兄目立ちすぎない？これって琥珀兄が主役でしょ」

主役は、皆さん十二人だけど？

珊瑚「……そんなに出てないけど後から来るの？」

そう事

珊瑚「……相手は、琥珀兄？」

此処からはノーコメント

珊瑚「え〜」

駄目なもんは駄目、そろそろ終わるよ。

珊瑚「あ、本当だ。それじゃね」

どうもね〜……後、ひき続き感想の方も待ってます。  
面白いだけでもいいですので、また次回に……

第七話 四月一日 午後 四

「・・・さて」

家を出たのは良いが何処に居るかは分からない。  
しかも話している間に日が暮れているので下手に探していると  
こっちが迷ってしまう・・・

「人に聞くにも誰も居ないし・・・」

けれどもそれは珊瑚も同じはずだ。

多分珊瑚も変な所には行ってないはずだから・・・

「あそこに行つたかな・・・」

珊瑚の行きそうな場所は・・・

SIDE・珊瑚

「はあ……何やってんだろ……」

感情剥き出しで出てった後、何も考えないで走ってたら……

「此処って昔来てた公園だ……」

あんな……

《私の好きな琥珀兄を持ってかないで!!》

って言ったからなのかな?……けど、

「……何であんな事言っちゃたんだろう……」

うう……今思つと恥ずかしい……

「……今まで言えなかったのに、ちゃんと言えたけど……子

供みたいだったかな？・・・  
・・・やっぱり駄目だ・・・」

もう駄目・・・涙が止まらない・・・  
もう・・・私の前から消えないで・・・

「・・・んご！珊瑚・・・！居た！」

「！・・・はく兄・・・！」

S I D E ・ 琥珀

よかった・・・小さい頃、珊瑚と初めて会ったこの公園だと思い来てみて・・・

「琥珀兄・・・」

「此処だと思ったからね・・・」

けれどもこの場合如何すれば良いのかな・・・？  
・・・そういえば。

「・・・珊瑚と会った時も泣いてたよね」

「・・・うん」

初めて会った八年前、この公園に来た時も珊瑚は泣いていた。  
その時も如何声を掛ければいいのか解らなく、途方にくれていた記憶がある。

・・・そういえば

「あの時は如何声を掛けたって？」

「・・・忘れたの？」

「覚えてるの？」

「覚え・・・ってあの時琥珀兄、私の頭に水掛けて  
《これで泣いたか判らないよね。それより一緒に遊ぼう！》  
と言って連れまわしたじゃん・・・」

・・・なんて事したんだ、自分・・・

「けど・・・あの時に琥珀兄の声掛けてくれたから笑えたんだよ・・・

あの時、私のパパとママが死んで・・・悠里兄たちが怖くて逃げた私を・・・

ただ泣いて逃げてた私を・・・光が見えなかった私に光を見せ  
てくれた・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

悠里と珊瑚が本当の兄妹じゃないのは後から聞いた・・・  
珊瑚の両親が亡くなり、親族はいなかったが親友であった白金家に  
養子で来たのだと・・・・・・・・

「・・・・・・・・さて！暗い話は終わりにして帰ろう！悠里兄たちが待つ  
てるし！」

「朝神さんはしてそうだけど、悠里はしてないよ。  
《帰ってきたか》なんて言ってそう」

珊瑚の調子も戻ってきたので家に戻る事したが、

「珊瑚、あのこくはk「ストップ！」」

「そ、それは今じゃなくてもうちちょっとロマンある・・・じゃなく  
て！兎に角帰ろう！」

「わ、解りました・・・」

こつちの方は聞く事が出来なかった。



第七話 四月一日 午後 四（後書き）

まだまだ続きます。」。

エイリス「何時まで続きます?」

「か二ぐらい?」

エイリス「そうなの?・・・それと」

はい?

エイリス「私は悪者な感じなのはなんで?」

え〜と・・・書いていたら何時の間にか・・・

エイリス「・・・これから大丈夫?」

とりあえずは・・・話は次ぐらいには一日は終わると思っ。

エイリス「その後は?」

葵の話になる。

エイリス「・・・はい?」

この話は次回にしま〜す。  
はい、カンペ

エイリス「えつと・・・『作者はまだまだ未熟なので読みにくい所があると思います。こんな作者ですがよろしくお願いします。』つてこれは自分でよんで下さい・・・もう居ないし、はぁ・・・？もう一枚ある・・・感想がありましたら是非』か・・・今まで一回も無かったのに」

第八話 四月一日 終(前書き)

言い訳はあとがきで

第八話 四月一日 終

家に帰ってみると、

「やっと帰ってきたか」

悠里は想像道理の答えをしていた。

「うん、ただいま悠里兄」

「ただいま、悠里。それで葵と朝神さんは？」

二人の姿はそこには無く、居間にエイリスが居るのは見えていた。

「あいつ等はもう帰ってるよ。後、エイリスがお前らに話があると  
な」

「エイリスが？解ったけど・・・なんだろう？」

「エイリス、話ってなに？」

「それは・・・」

その後いきなり

「ごめんなさい！珊瑚さん！」

珊瑚に向かって謝ってきた。

「え・・・行き成り謝れても・・・いや、こっちもごめん。勝手な事ばかり言っちゃて・・・」

両方とも謝っているが・・・

「エイリスは珊瑚に嫉妬してたんだ」

「嫉妬？・・・なんでまた？」

「それは本人に聞け」

投げやりですか……

「アホ、此処からはエイリス本人の口から聞いた方が良いに決まってるだろ。それに……」

「それに？」

「エイリスと珊瑚は色々似ているしな……」

「似ているって……」

「じゃあな」

・ ・ ・ ・ ・

「エイリス、悠里たちになにを話したの？」

悠里も居なくなり、残った三人で最後の話し合いを始める事にした。

「悠里さんたちには、此処に来た経理を話しました」

「それ、あたしも気になる」

「そうだね。どうして此処に来たの？わざわざこんなところに来なくても・・・」

「此処しかないんです」

え？

「此処しか・・・ない？」

珊瑚も同じく感じていたが・・・

「何でまた・・・」

「それは・・・もう、私には何も無いから」

「何も無い？」

「はい。全ては半年前の事です・・・」

S I D E : エイリス

両親が半年前、交通事故で亡くなったのが始まりでした。

両親の死を受け入れきれなく、信じたくなかった。

だけど、世界はあまりにも冷たかった。

葬式を終わらした後は、お金目当ての親戚たちにたらい回しされて、  
最後、もう取るお金が無くなりと言われたのが

「君の両親の友人の子、日本の一ノ瀬琥珀と結婚をしなさい」

厄介払いのごとく、祖国から出て行くように言われました。

けれども、其の時は嬉しかったのです。

何も取られない、この人達から会わなくて済む、と。

S I D E : 琥珀

「そしてこの日本に来たんです」

「……そんな」

「……」

珊瑚も僕も言葉を失った。

こんなので……！

「私は不幸なんだって、思っていました。

けれど、それは間違えでした……珊瑚さん、すみません」

「え、何で……ってまさか悠里兄から！」

「はい。私は居なくなっただ後、この話をしました。其の時に

《お前は悲劇のヒロインになって自分に酔っているのか？》

と言われて、目が覚めました。こんな事世界の中であり得る事だつて……

私よりもっと理不尽な事を受けた人がいると」

「それがあたし……だつて？」

「珊瑚……」

そうだった、珊瑚の両親はある議員の息子の車に轢かれて亡くなりその議員が汚点を無くすためにお金の力でもみ消したと……

「だから、珊瑚さん……すみませんでした。あなたの「ストップ」

珊瑚さん……?」

「あのさ、あの時の事はあんまり覚えてないんだ。だからこの事はもういいから。」

それにあたしは今、幸せだから」

「珊瑚さん」

「あたしには新しい父さんと母さん、何だかんだで頼もしい兄さんに無愛想だけど優しい友人、そして……」

チラリと、こちらを見て

「何処か抜けててお人好しだけど、とても鈍感な……好きな人がいるから」

「珊瑚さん……」

珊瑚……知らない間に成長してるな……って、

「だから」

「はい?」

「琥珀兄の事は諦めて」

「いやです」

あれ?空気が変わってきたな……

「いやってなんでよ！少し考えれば無理だと判るでしょ！」

「お断りします」

「だから何で！」

エイリスが笑顔で

「私も琥珀が好きだからに決まっています」

「な！・・・」

「私も切っ掛けがこの様になりましたが琥珀の事が好きなのは変わりません  
ですので」

「はい？」

エイリスが此方を向き

「琥珀、言う順番が逆になりましたがもう一度。  
貴方の事が好きです」

「え、いや、その」

「返事を聞きたいですが」

「あたしも聞きたい」

うう、如何しよう・・・こんな展開考えた事も無かった。

珊瑚は妹のような感じだったし、エイリスは昔の幼馴染、だから……

「ごめん、僕には自分の気持ちかわからないんだ」

こんな卑怯で、駄目な考えしか思いつかないけど、

「だから、エイリス、まずは友人から仲良くしよう。珊瑚も答えられるまでもっと仲良くしよう」

「……」

「やっぱり駄目だね、こんな……」

「ううん、違うよ琥珀兄」

「違います、琥珀」

「違うの？」

「琥珀兄……」

「琥珀……」

貴方が『好き』だから……よろしくね」

「……………」

こうして今までの日常は終わり、新しい光が入る事で  
また新しい日が始まり……  
それが新しい繋がりが出来たのです……

## 番外

「所で、エイリスは何処で暮らすの？」

「え？一ノ瀬宅 ここ ですよ？」

「まあ、仕方ないけど……」

「部屋はじゃあ……」

「琥珀と一緒に……」

「それはちよつと・・・駄目!」

第八話 四月一日 終（後書き）

・・・

琥珀「今回は掛かりに掛かったね」

悠里「いや、掛かりすぎが二ヶ月は」

珊瑚「それでいいの作者」

本当にすみません

麻神「まあまあ、一体何があつたの」

新しい学校に上手く馴染めなくて・・・書きたくても  
書けず・・・

エイリス「それでこんなに・・・」

葵「今後はどうだ。無理なら」

まだ書きたい事があるし、最後までは・・・

????「そうですね。頑張りましょう!」

はい！と言つ事でこんなのも

「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「「」

悠里「一人多くないか？」

それは次回に……

## 第九話 入学式前

SIDE：珊瑚

本日は晴天。そして、

「珊瑚と葵の入学式か・・・」

「そうだね。」

そう、あたしと ついでに葵 の入学式。  
悠里兄は後からと言っていたからしばらく二人きり・・・だったの  
だけど

「そういえば、葵さんは？」

そう、エイリスが居なければ・・・

光探し

「葵は先に行ってるかな。彼、真面目だし」

それは琥珀兄の前での時だけ。

アイツは先に行ったのはさっさと席に座りただけで、真面目ではない。

「そうなんですか？」

「きっとそうだよ」

「それはいいとして、エイリス。何で居るの？」

エイリスは学校に行く意味がない筈・・・

「それは、手続きで・・・」

「手続き・・・転入の？」

「そうです。」

「そう・・・それって入学式内に終わるの？」

悠里兄たちの話だと

『入学式ってどんなでだっけ?』

『悠里は寝てたから知らないだろうけど、三十分で終わったよ』

『結構時間掛かるんだな』

『いや、全然短いから』

だったから三十分で終わるのだろうか・・・

「それなら大丈夫です。手続きは殆ど終わってますから」

「用意周到ね・・・」

そんな事を話していると、

「あれ、琥珀じゃない」

後ろから琥珀兄に声を掛ける人が・・・また女の人だ・・・  
振り返ると綺麗な短い黒髪の優しそうな美人だし、居るだけで目立ちそうな人だけど  
誰だろう・・・

「はい?・・・あ、会長」

会長?・・・って事は・・・

「琥珀、誰です?」

「彼女は・・・」

「私から言っわ。私は風見りえ、生徒会長をやってるわ」

「生徒会長さんですか……」

琥珀兄……何で生徒会長と知り合いなんですか……

「琥珀って凄いですね、会長と知り合いなんて」

「そうかな？」

「いや、琥珀兄って交友関係狭いからこんな……」

綺麗な人と、言う前に後ろから

「お！三人とも此処に……って、やば！」

悠里兄が来たのだが会長を見た途端に普段見たこと無い嫌そうな表情を……嫌そうなの？

「ん？って悠里！なんでアンタ居るのよ！」

会長も悠里兄に気がついたら気がついたで、行き成り怒り始めた。

「それはこっちのセリフだ、何でりえ先輩がいるんだよ」

「入学式で会長として挨拶するのよ、文句ある？」

「普段会長らしい事しないで機械弄りするりえ先輩が？」

「そ、それはアンタがそのところしか見てないからでしょ！」

あ、あれ？第一印象と全然違う反応をし始めてきた・・・

「琥珀兄、会長さんっていつもこんな感じなの？」

「いや・・・いつもは優しい先輩だけど悠里が相手だと・・・」

「あなるんですか？」

「うん」

そんな事を話していると向こうにも変化があり、

「そんじゃ今度見せてください、りえ先輩の会長としての仕事ぶり」

「そ、そんなの!!！」

「やっぱりやってないか」

「ち、違うの!!！た、ただ緊張して失敗したところ見られたくないだけで・・・」

「ん、何か言ったか？」

「か、会員以外は見せられないだけ！」

この反応は・・・もしかして・・・

「はいはい・・・それじゃ学校に行きますか、時間もやばいし」

「時間？・・・急がないと不味いね」

時計を見てみると後少して始まる時間になっていた。

「うう、悠里に構ってたらこんな時間に・・・」

「それはこっちの・・・そんな事より、それと」

「きゃ！何するの!？」

悠里兄が会長を背負い始めた。

「りえ先輩足遅いだろ、一緒に走るより背負った方が速いから」

「・・・それじゃあ頼みますよ」

「頼まれますか」

そしてそのまま走り始めた悠里兄たちを見て慌てて追いながら思ったのが

「会長って・・・もしかして」

「悠里の事が苦手だよ」

琥珀兄の的外れな答えを聞き流し前を見ると、

「しっかし・・・意外と軽いな」

「意外って何ですか！意外って！」

「仕方ないだろ、こんな事した事無いんだから」

「私も……始めてね」

「ふん……もうそろそろだし降りるか？」

前を見ながら走る、だから見えないのだろう。

「……そう少し」

会長の顔が嬉しそうにしている事を

## 第九話 入学式前（後書き）

やっと書けた・・・前にも言ったなこれ・・・

悠里「それじゃ、覚悟できたか作者」

珊瑚「同じく」

す、すみません

琥珀「三、四ヶ月ほったらかしでしたね」

書いたらやり直しの連続で・・・

葵「それで俺の出番は一瞬」

エイリス「私は居るだけ」

全員「覚悟は出来たか（ね・かな・な）？・・・」

・・・逃げるが勝ち

全員「逃げるな！！」

次は早く出すから！！

りえ「説得力ないわね」

????「早く・・・ね？」

はい！・・・最後誰？

「？？？」・・・一辺天国に行く？」

すみません！・・・後、珊瑚さんこれお願い！

珊瑚「はいはい、それじゃ・・・感想をお願いします！・・・それだけ？」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2344g/>

---

光探し

2010年10月28日06時02分発行